

九州産業大学大学院

KYUSHU SANGYO UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL



令和2年度 研究成果発表会

日本近代文学論

博士前期課程

国際文化研究科 国際文化専攻 国際文化研究分野

内田大智

主査 和田勉
副査 天野聡一
佐喜本愛

研究の背景

前半部分の芥川龍之介作品について。これについては学部生時代から行っていた芥川の研究内容を充実させるために、研究の続きを行いたいという考えから、前半部は芥川の研究を行うと決めていた。

そして後半の伊藤計劃の作品について。計劃の作品を扱ったのは、私が大学に入る前に計劃の作品と出会い、それ以来彼の作品を愛好しているという至極個人的な理由もある。だが強い感銘を受けた作品であったという理由以外にも、大学院において計劃の研究をすると決める前の段階で、彼の作品についての研究がほとんど行われていないということに気づいたのもその理由にあった。大学院での研究において計劃の作品について研究を行い、僅かでも彼の作品についての研究内容が充実されればと思い、研究題材に取り入れたというも研究の背景にあった。

研究の目的

芥川龍之介作品の研究についての目的はとてもシンプルで、学部生の頃に行っていた研究を続け、その内容をより発展・充実させていきたいというのが研究の目的である。

そして計画の作品については、ほとんど研究が行われていない作品のため、今回の研究によって作品の基本的な部分から研究を行い、彼の作品についての研究を僅かでも充実させることが研究の主目的である。

研究の概要

芥川龍之介の作品についての研究では『羅生門』と『蜜柑』について取り扱った。研究では原作となった古典の作品との比較や、作中で使われている単語の色彩について着目し、作品における芥川のフィクションについて研究を行った。

計画の作品については、まだ研究がほとんど行われていないため、作品が影響を受けたのは何の作品なのかの調査や、作者の計画の人間関係、彼が患っていた病に着目し、それらが作品に与えた影響についてをまとめている。

感想・まとめ

研究を行って、自分の能力の限界を知ることが出来た。

また研究する過程で多くの書籍に触れ、そこで研究の手法というのも本当に千差万別で、思いもよらないアプローチで研究をしている人がいることを知り、自分の中の世界が広がったような感覚があった。そしてもっとも学べたことは情報の調べ方である。専門性の高い情報ほど見つけ出すのが困難で、そこで今後生きていく上でも役立つことを学んだと思う。

指導教員コメント

内田大智氏は卒業論文で芥川龍之介を取り上げたが、修士論文では芥川龍之介と伊藤計劃を取り上げ、近代文学について独自の視点から解明している。芥川の「羅生門」については『今昔物語集』との詳細な比較対象を行い、「蜜柑」については色彩表現の視点から分析した。また伊藤計劃の『屍者の帝国』については人名等に注釈を付けるという作業を通して、作品の読解を深めている。

和田勉